

研究種目：若手研究(B)

研究期間：平成 20 年度～平成 21 年度

課題番号：20730518

研究課題名（和文） F. フレーベルにみる自然科学と教育実践との連関

研究課題名（英文） The linkage with natural science and the educational practice to watch to F. Fröbel

研究代表者

松村尚子 (MATSUMURA NAOKO)

美作大学・生活科学部・講師

研究者番号：50341136

研究成果の概要（和文）：F. フレーベル(Fröbel, F. W. A. 1782-1852)の自然諸学教授の着想をもとに、19 世紀前葉における人間形成と学術的な知識との連関について考察した。彼は寄宿学校「一般ドイツ教育舎」を 1816 年に設立以降、1820 年代に彼はいくつかの論文を公表してきた。それら「カイルハウ小論文」と呼ばれる著述には、自身の教育舎の教育方針や内容、その有用性が主張されている。また、彼は主著『人間の教育』(1826)や「ヘルバ・プラン」(1828/1829)といった体系的な教授構想として読解できる文書を残した。加えて、週刊誌 1826 年に発刊した週刊誌「教育的家庭」(1826)においても教育舎での実践やその教授の断片がうかがえる。1820 年代を中心としたフレーベルの著述を再構成すると、教授項目の中には基礎カテゴリーも含まれるが、同時にギリシア語やラテン語、博物学や地理、自然諸学といった民衆学校には見られないものも提供されていたことがわかる。フレーベルの教育上の思索は単に幼児期に留まらず、少年期や青年期までを含むものであったことがうかがえる。しかし、フレーベル研究者の間でも 1820 年代における活動の全容を知る者は少ない。その要因としては、フレーベルの思想や実践について後世への影響が主として幼児教育の領域にとどまっていたこと、そのために学校教育に関する事項は伝記的研究の範疇にとどまってきたこと、また第二次世界大戦後のドイツ分断を契機に資料収集が難しかったことなどが挙げられる。論者がその点で注目したのは自然諸学の教授である。そもそも教育舎設立前にフレーベルは鉱物学研究者であった。教育舎設立を決意したと同時期に彼は大学教授職の声もかかっていたのである。となれば、ある程度当時最新の鉱物学および自然諸学研究の成果を踏まえ学術的な知識と基礎陶冶、人間教育との連関について思索を深めたことを、未刊行資料「植物学構想」の読解を中軸にフレーベルの自然諸学教授の再構成を進めた。

研究成果の概要（英文）：The basic category is included in the instruction item when I reconstitute the writings of Fröbel mainly on 1820's, but the thing which is not seen at the same time in Greek and Latin, natural history and geography, the people school(in German; Volksschule) such as nature different kind of studies understands what was

provided. From here, the educational contemplation of Fröbel is not fastened in merely infancy and can watch that I included boyhood and youth.

There are few people knowing the whole aspect of the activity in 1820's even between Fröbel researcher. The factor includes that document collection was difficult with Germany division after World War II the influence on coming ages having been mainly limited to the domain of the preschool education about thought and practice of Fröbel, therefore the matter about the school education having been limited to the category of the study of the biography again. It is a professor of natural different kind of studies that advocate paid attention at the point.

I considered the human being formation in the preceding page and linkage with scientific knowledge in the 19th century, based on the idea of the natural different kind of studies for educational practice. He established boarding school „allgemeine Detusche Erziehungsanstalt Keilhau" in 1816 and was concerned with an educational practice. He announced some articles in 1820's in the writings to be called those „Keilhauer Werbeschriften"(1820-1823), an education policy and contents of his boarding school „Erziehungsanstalt Keilhau“ of his own, the utility are insisted on. In addition, he left the document which he could read and understand as a systematic class design such as most important work „Die Menschenerziehung“(1826) and „Helba-Plan“(1828/1829). The piece of the practice at „Erziehungsanstalt Keilhau“ and the educational practice is indicated in weekly „Die erziehende Famielie“ (1826) which published it in 1826.

In the first place Fröbel was a mineralogy researcher before „Erzihungsanstalt Keilhau“ establishment. He suffered from the voice of the university professorship for the same period when he decided the „Erzihungsanstalt“ establishment. From there, he was going to pursue a course of study that he applied speculation of the mineralogy (crystallography) to.

What stood on the result of the latest mineralogy and the natural different kind of studies study in those days to some extent, and was able to deepen in contemplation about scientific knowledge and basics cultivation, linkage with the human being education the reading and understanding of non-publication document "botany design" in the axis of Fröbel was able to advance in the reconfiguration of the different kind of studies class naturally.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	500,000	150,000	650,000
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：

キーワード：F.フレーベル／教育構想／自然誌／植物学／球体法則／実物教授

1. 研究開始当初の背景

論者がこの研究を企図する契機となったのは、フレーベルの歴史的定置規定をめぐる1980年代以降の研究成果である。その代表的な研究は、H.ハイラントによるものである。彼の研究関心は、フレーベル受容の歴史において無批判になされた理論と実践との関連付けを打破し、原典分析を通じて再構成することにあった。その着想の根底には、以下のような一次資料の問題が存する。

フレーベルの遺稿は旧東西ドイツの統合以降も散逸しており、没後150年以上経過した現在でも全集は刊行されていない。1980年代から資料批判を伴う研究が旧西独・旧東独ともに進んだが、1990年の東西統合以降、旧東独側に収蔵されていた資料が一部散逸している。また、これまでの教育思想研究においては、主としてフレーベル自身による刊行物およびフレーベル運動の展開に即して編集された再版資料に依拠するものが圧倒的多数を占める。本邦において「再版資料」としてもっとも著名な資料は、ハンブルクのフレーベル運動に携わっていたW.ランゲによる『教育学著作集』[Lange, Wichard (Hrsg.): Friedrich Fröbels gesammelte pädagogische Schriften. 3 Bde. Leipzig 1862/ 邦訳 小原國芳・荘司雅子監訳『フレーベル全集』玉川大学出版部、1977-1981年]である。ランゲ版著作集の邦訳が「全集」と銘打っていることも関連するのであろうか、本邦のフレーベル研究者の間では一次資料の吟味は進展していない。付け加えれば、フレーベルについては出版物以外の日記、書簡、

草稿等の資料数、その量は膨大である。未だに「全集」が出版されていないのには、膨大な資料がドイツ国内に分断されて保管されてきたために、断片的ながらよりフレーベルの実践や思考の軌跡がより鮮明に残されている書簡類や日記、草稿といった資料が眠ったままの状態に留まらざるを得なかったという事情がある。

また、この状況を許してきた要因には、やはりフレーベルの歴史的な位置づけが挙げられよう。本邦に限らず、世界的に「幼児教育の父」としてフレーベルは紹介され、受容されてきた。しかし、それが「〈真正の〉解釈」として適切か否か、ということは論じられてこなかった。このことは、解釈学の文脈においてフレーベルは「ロマン主義」者として捉えられ、19世紀のレトリックである「〈子ども〉期への憧憬」を後世の者がスローガンとして流用したためでもあろう。また、幼稚園(*Kindergarten*)という教育施設の普及活動を通じて、その創始者フレーベルを強調するあまり、フレーベルが幼児教育にしか尽力しなかったかのような印象を与えていることも事実である。

以上を踏まえ、未刊行資料を活用し新たなフレーベル像の再構築も視野に入れた研究としたい。

2. 研究の目的

本研究の研究期間2年間に、論者は1820年代のフレーベルの諸活動に限定して、フレーベルの教育思想の主要概念である「球体法則」理念が教育という実際の場におい

てどのように生起・生成するか、その動的過程をどのように提示したかを、自然科学に関する教授構想に注目し、未刊行資料の読解をすすめ、解明に努めた。

3. 研究の方法

フレーベルの教授論における「自然」把握の実際を、教授対象とした事柄から解明するために、論者はフレーベルの未刊行資料「植物学のための構想と図表」

[*Ausarbeitungen und Tabellen zur Botanik: Berliner Nachlass: Deutsches Institut für Internationale Pädagogische Forschung, Bibliothek für bildungsgeschichtliche Forschung/ Archiv. Bestand der früheren Akademie der Pädagogischen Wissenschaft, Sig. 202*]に着目した。この資料を読解し、教授対象としての自然界を主領域に、フレーベルの科学と教育実践との連関について明らかにした。

4. 研究成果

19世紀前葉のドイツにおいては、民衆学校の教授項目はペスタロッチー(Pestalozzi, J. H. 1746-1827)の直観カテゴリー、すなわち算術、形量、言語を基盤とするものであった。また、この三つのカテゴリー全般において聖書を活用することが通例であった。民衆学校においては牧師が教師を務め、聖書を読み、そこに記された歴史を紐解き、諸事の舞台となった古代世界の地理や自然界における序列を提示する。またドイツの教会の成立を子どもたちに話して聞かせることで、ドイツ史やドイツの地理に関しても教授しようとした。聖書に示された世界観を学ぶことと平行して、民衆学校においてはドイツ諸領邦を維持する社会的秩序も保つための教授対象・教授計画を文教政策

の側から指示してきた。当然のことながら、民衆学校の教育は領邦民として組み込むためのものであったから、知識人としての教授は論外であった、少なくとも主の目標ではなかったと言えよう。

フレーベルは民衆学校のための教育を模索していたとは断言し難い。寄宿学校「一般ドイツ教育舎」を1816年に設立以降、1820年代に彼はいくつかの論文を公表してきた。それら「カイルハウ小論文」と呼ばれる著述には、自身の教育舎の教育方針や内容、その有用性が主張されている。また、彼は主著『人間の教育』(1826)や「ヘルバ・プラン」(1828/1829)といった体系的な教授構想として読解できる文書を残した。また、週刊誌1826年に発刊した週刊誌「教育的家庭」(1826)においても教育舎での実践やその教授の断片がうかがえる。1820年代を中心としたフレーベルの著述を再構成すると、教授項目の中にはもちろん、数・形量・言語の基礎カテゴリーも含まれるが、同時にギリシア語やラテン語、博物学や地理、自然諸学といった民衆学校には見られないものも提供されていたことがわかる。こうした教授項目の存在が、カイルハウ教育舎において教育対象となった子どもたちの多くが、当時拡大しつつあった商工業階層や官僚階層、いわゆる「中間層」出身の子どもたちを育成する学校として運営されていたことを裏付けている。

しかしながら、フレーベル研究者の間でも1820年代における活動の全容を知る者は少ない。その要因としては、フレーベルの思想や実践について後世への影響が主として幼児教育の領域にとどまっていたこと、そのために学校教育に関する事項は伝記的研究の範疇にとどまってきたこと、また第二次世界大戦後のドイツ分断を契機に資料

収集が難しかったことなどが挙げられる。しかし、『人間の教育』ならびに「ヘルバ・プラン」の構想上明らかなように、フレーベルの教育上の思索は単に幼児期に留まらず、少年期や青年期までを含むものであったことがうかがえる。

論者がその点で注目するのは自然諸学の教授である。そもそも教育舎設立前にフレーベルは鉱物学研究者であった。教育舎設立を決意したと同時期に彼は大学教授職の声もかかっていたのである。となれば、ある程度当時最新の鉱物学および自然諸学研究の成果をしりつつも、教育舎へと転じたフレーベルであるからこそ、学術的な知識と基礎陶冶、人間教育との連関について思索を深め、実践案の提出に至ったのではないだろうか。

そこで、未刊行資料の中から博物学や自然誌に関わる資料の読解も含め、フレーベルの自然諸学教授の再構成を進め、当時の自然諸学教授が人間形成にとってどのような意義を与えられていたかを考察したい。なお、フレーベルの自然諸学に関する考察に入る前に言及しておきたいことは、彼が社会的活動を展開した 19 世紀前葉にあつて「自然」諸学の概念はそれ以前に比べ飛躍的に拡大した、ということである。言い換えれば、概念上の問いとして、„Natur“の重層性が指摘できるだろう。「自然」という語は「本性」、生まれ備わった性質を意味する。さらに「人の手が加わっていない状態」を意味することも多い。この場合の対義語は「技術(Kunst)」である。そして、ヨーロッパの思想圏においては特に「神の被造物」、神の恩寵や啓示を具有する存在を指す場合に用いられる。フレーベルの資料を読むにあたっては、「神の被造物」として、„Natur“概念を理解することが多い。これを再考することも、この研究の目的の延長線上にある。

1820 年代のフレーベルの軌跡を概観すると、まずカイルハウ小論文のひとつ「カイルハウ一般ドイツ教育舎の続報」(1823)では、教授対象に地理・地理学(Erdkunde; Geographie)という大項目があることが確認できる。この項目においてフレーベルは自然誌(Naturgeschichte)や鉱物学(Mineralogie)、植物論(Pflanzenkunde)といった小項目を列挙している。『人間の教育』においては外的世界(Außerem)の事象を扱う教授項目として、自然および外界の考察、色の練習、外的・物理的・空間的表象の練習、方眼上での作図、算術、表象様式の知識がその教授方法の概略とともに記されている。また「ヘルバ・プラン」の初等学校段階の教授案においては、以下のような外的世界すなわち自然界の事象を扱う教授項目が提示されている。

A クラス：数、方眼紙での線画と表象様式の見出しかた、色彩の練習、外界の観察、応用算術、表現様式の学説

B1 クラス：数、筆算、応用算術、方眼紙での線画、図像の見出しかた、色彩の練習、外界の観察

B2 クラス：数、筆算、応用算術、白紙での線画・形態描画、自然論〔土壌・植物・動物の論〕、地理論、量の学説

C クラス：数、自然に即した写生、自然論〔土壌・植物・動物の論〕、地理論、筆算、自然学、量の学説

B2 クラスおよび C クラスに盛り込まれている「自然論(Naturkunde[Irden-, Gewächs-, Tierkunde])」であるが、これは当時のその他の教育機関でも開設されていた「自然誌」の科目と類似していると想定される。19 世紀前葉における「自然誌」とは、存在するものに自律的活動性を認めた上で、生物・地質鉱

物・気象・技術等、雑多な事柄について目録を作成する教授項目でもある。このフレーベルの「自然論」教授は、未刊行資料のひとつ植物学構想(Berliner Nachlass: Deutsches Institut für internationale pädagogische Forschung. Bibliothek für bildungsgeschichtliche Forschung [DIPF. BBF]/Archiv. Bestand der früheren Akademie der pädagogischen Wissenschaften[Archiv. APWA] Friedrich Fröbel. Sig. 202: Ausarbeitungen und Tabellen zur Botanik. Okt. 1828, o. D. [Abkrz.: BN 202])を参照すると、当時の自然界を鉱物界・植物界・動物界と三分し、その性質から分類し、配置するリンネ(Linné, C. v. 1707-1778)と同様の方法を採用していることが判明した。

リンネは18世紀ヨーロッパを代表する生物学者と言ってよいだろう。彼は学名の二名式命名法(ラテン語で表記し、はじめに属名を名詞で、次に種小名を形容詞ないしはそれに相当する語で記す方法)の導入によって「近代生物分類学の父」とも呼ばれている。しかし、西村によればリンネが生きていた当時、この二名式命名法の提唱が賞賛されたのではなく、著書『自然の体系』(初版1735)における植物の分類に関する独自性、新たな分類体系の提唱によってリンネは名声を得たという点である。興味深いことに、リンネの『自然の体系』では植物界を《婚姻》という概念から区分していることである。植物界を体系化する際、リンネは「植物の花は喜びである—このように植物は繁殖する！」と書き添えているように、植物の本性を花と結実器官に見て取る。とりわけ花を重視し、植物の区分において「果実よりも花が重要であり、「花の本質は葯と柱頭にあ」とされる。リンネにおける《婚姻》とは、本性である結実の前段階にあたる開花を指す。開花期の状

態によって、花が観察可能な状態にあるかないかでその《婚姻》を「公然」と「秘密」とに区別する。さらに雄しべと雌しべの数と構造によって24綱に区分する「性の体系(systema sexuelle)」を提唱した。西村によれば、このリンネの「性の体系」は人為的分類であったが、その分類法の明快さもさることながら、当時の宗教的心情を汲んで敢えて種子や果実を結ぶという植物の性質を本質的属性として神の恩寵に沿った分類として戦略的に学説にまとめたという(西村三郎『リンネとその使徒たち—探検博物学の夜明け—』朝日新聞社、1997)。この「性の体系」はフレーベルの持論のひとつ球体法則観との親和性が高いと思われる。というのも、フレーベルは「学問(Wissenschaft)」を「婚姻(Ehe)」に見立て、「婚姻(Ehe)の中にのみ、完全な学問は存在する」との見解を持っていたからである。

フレーベルの教授論において肝要な点は、彼の教授項目が系統的に編成されている点と、その反対に《全は一、一は全》ともうかがえる球体法則観によってその教授項目が相互に関連を有している点、あるいは教授内容が混淆する場合もある点である。それは彼が基礎陶冶と実質陶冶とが混淆しているかのように説明する記述からもうかがえる。それは、実質陶冶と形式陶冶とが峻別しがたいことを示唆しているが、同時に「自然」の重層性にも言及するものとして留意したい。人間の本性は本来ならば技芸と対峙するものである。しかしフレーベルにおいては人間の本性と技芸、および本性を対象として研究する学術も対立するものではない。人間形成の手段であると同時に目標として掲げられる同一体ともみなされているのである。

先述したように、フレーベルは自然という述語を教授あるいは教育の文脈で用いる際

にはしばしば《婚姻》という語を合わせて用いている。それは単に 1810 年代に構想された球体法則の命題のみならず「教育的家庭」内の「婚約」という文章にも現れていよう。この文章は実際カイルハウ教育舎の構成員が婚約した際の宴を報告するものであるが、同時に人間形成のありようをも暗示したものととも考えられるのである。

フレーベルがなぜそのような教授を採用し、《婚姻》という暗喩を用いたのか。それは、仮にフレーベルがリンネの方法を男性的なものとし、なおかつ法則より先に実物の観察による精査を率先することを女性的な区分方法と見なしていたとしたら、学としても、教授としても男性的なるものと女性的なるものとの合一が図られると言えるのではなかろうか。その点では、後の幼児教育方法論において母性の重要性を説き、実物教授の先進性について示唆したとも理解できよう。

なお、フレーベルが活動した 1820 年代は文化史的にはビーダーマイヤー期と呼ばれる、「中間層」興隆の時期である。ビーダーマイヤー期は確かに「中間層」の文化向上の時期にあたっているが、平行して職場と家庭との分断に代表されるように、生活空間の細分化が生じた時期でもある。他方、前述したように科学史の領域においても細分化が進み、肉眼では観察不可能な不可視の領域にまで研究対象となりつつあった。フレーベルは敢えて教授対象を当時としては最新の領域を取り上げつつ、その教授方法に観察と演繹、推論を混淆させるという手法を採用した。その点においては、様々な領域が細分化されることに対して再構成を促す教授として構成されていたのである。

また、フレーベルの球体法則観においても細分化したものの合一という思想上の具現

化がなされたと言える。とりわけ、男女の《婚姻》に新たな意味を与え、学術進歩における不可視領域にも原理原則があると仮定することも忘れなかった。《婚姻》に関わる用語の使用法は確かにジェンダー的論点による検証をまたねばならないであろうが、この暗喩によって後の幼稚園教育において女性教員の出現を想起したとも言えるだろう。その点では近代的な生活空間の分断とそれに基づく人間形成の細分化に対してより包括的な道筋を与えようとした思想としてフレーベルを評価することもできるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

松村納央子 F. フレーベルにみる自然諸学教授、教育哲学会第 52 回大会一般発表、2009. 10.

〔図書〕(計 1 件予定)

松村納央子 美作大学、F. フレーベルにみる自然諸学教授、2010. 7.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松村尚子 [筆名：松村納央子] (MATSUMURA
NAOKO)

美作大学・生活科学部・講師

研究者番号：20730518